

酪農家を対象に実施した初動防疫演習

中央家畜保健衛生所 たしるまなみ 田代真奈美 あらいすみえ 新井澄江

1 背景

本県では口蹄疫や鳥インフルエンザの発生に備え、毎年多くの防疫演習が行われており、昨年度は合計 69 回の演習が行われた。昨年度の演習のうち 66 回が行政関係者を対象としており、3 回が農家に対する防疫演習となっている（図 1）。これまでの防疫演習では、伝染病発生時のまん延防止を重要視しており、伝染病発生時の防疫作業（殺処分や埋却作業など）の速やかな進行を目的に行政関係者間での演習が多く実施されてきた。農家に対する演習でも、伝染病発生時の早期発見・早期通報及び通報後の対応など自農場から病原体を広げないことを目的に行われてきた。

農家に対して実施される演習は少ない。農家にとって「防疫演習」というと、特に伝染病発生を前提とした殺処分や埋却作業を連想するため敬遠されてきた。伝染病発生時のまん延防止に備え訓練しておくことは重要であるが、農家にとって“発生したらどうするか”ということ以上に、まず“発生させないためにはどうするか”、ということが必要となる。そこで農家に受け入れてもらえる演習を企画し、地域一体で取り組む防疫演習を実施したのでその概要を報告する。

2 演習実施までの経緯

農家の視点に立った演習として、伝染病発生予防上重要となる消毒を演習のテーマとした。さらに演習内容をより実践的に、自農場での作業をイメージしながら考えてもらうため農場内で演習を実施することにした。演習農場は管内で最も養牛農家数の多い N 市で調整することとし、同市内酪農家を参集者とした。

演習実施に向け、まず市の畜産担当者及び畜産関係団体に演習の意義・目的等を説明し理解を得た後、演習農場として地域のリーダー的存在である大規模酪農家 A 農場の推薦を受けた。A 農場に演習について説明した上で、他農家の参加に対し防疫対策を徹底することを決め、実施の同意・協力を得ることができた。演習当日の具体的な防疫対策は以下の三点とした。①自己農場での作業終了後、シャワー等の後着替えて参加 ②衛生管理区域外での駐車 ③受付時に配布するシューズカバーの着用。

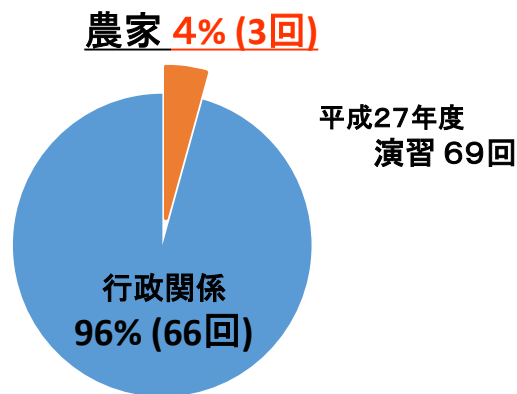


図 1. 平成 27 年度の演習実施対象者

3 演習の内容

消毒をテーマに演習を実施し、有効な消毒方法を再確認することで口蹄疫を含めた疾病の発生予防につなげることを目的とした。

消毒は農家にとって日常作業の一環である。しかし消毒液の作成時に量を計り、正確な濃度を毎回確認して使用している農家は少なく、目分量で使用する農家が多い。石灰散布でも農家によって散布量が異なっており、薄すぎたり濃すぎたりする。そこで、演習を通し改めて適切な消毒方法を確認するとともに、消毒薬の特性及び注意点を再確認した。

内容は4項目に分かれており、最後に演習内容を評価するためにアンケートを実施した。

(1) 消毒薬の展示

口蹄疫ウイルスに効果のある酸性及びアルカリ性の消毒薬、消毒薬として適さない界面活性剤やアルコール等を展示し、それぞれの消毒薬の特性を説明した(図2)。消毒薬使用法の注意点として以下の三点を重点的に説明した。①目的に合った消毒薬を使用すること ②適正濃度で使用すること ③消毒槽をこまめに取り換えること。加えて農家に消毒薬のpHをリトマス試験紙で実際に確認してもらった。



図2. 消毒薬の展示

(2) 石灰散布量の比較

口蹄疫や鳥インフルエンザの発生時、畜舎周囲に1㎡あたり0.5kgから1kgの散布量が推奨されている。①1㎡あたり0.5kg、1kg、3kgを散布し、②粉状石灰と並べて同量の顆粒状石灰も散布し、形状の違う石灰を比較した。畜舎周囲に散布された各石灰の見目の違い、粉状石灰に比べ顆粒状石灰はムラができやすく多めに散布する必要があることを確認した。



図3. 石灰散布

(3) 車両消毒の実演

口蹄疫の発生時、病原体の侵入を防ぐため車両消毒は車の隅々まで行わなければいけない。しかし農家にとって車両消毒とは、タイヤを消毒すれば十分だと考えていることが多い。そこで演習では、①タイヤだけでなくタイヤハウスや車体の上部から下部、運転席のマットなど細かいところまで消毒すること ②消毒は強い水圧で大量の消毒液を使って消毒すること ③車体だけでなく、ハンドルやサイドブレーキ等の車内も消毒することを確認

した。

(4) 道路消毒液散水車の実演

口蹄疫発生時、宮崎県で使用された道路消毒液散水車を再現した。演習では、①農家自身でも簡単に製作できること ②道路消毒液散水車は緊急時だけでなく平常時でも広範囲な消毒に使用できること ③実演にて散水機の仕組み及びどのように消毒液を散布するのかを確認した (図4)。



図4. 道路消毒液散水車

(5) アンケート

農家の視点に立った防疫演習として、消毒という基本的なテーマの演習内容が理解できたか及び農家の望む演習はどのようなものかを確認するためアンケートを実施し、回答を得た。

演習全体の評価では、消毒などの内容は「理解できた」79%、「工夫が必要」14%、「無回答」7%であり、概ね良い結果となった (図5)。

項目別の評価では、消毒薬の展示及び石灰散布の項目に全員が良かったと回答した。車両消毒では92%、消毒液散水車では50%の農家が良かったと回答した。

他にも、「農場で実施する演習はわかりやすく学べてよかった」、「今後も演習を実施してほしい」等の意見もあった。

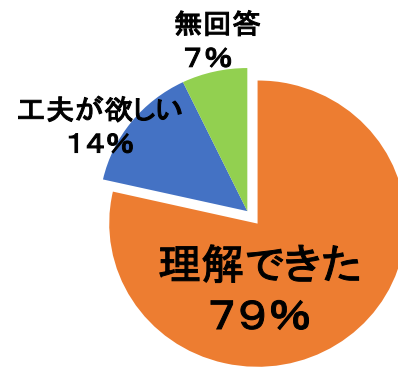


図5. 演習全体の評価

表. 項目別評価 (回答数 %)

	良かった	悪かった
消毒薬の展示	100	0
石灰散布	100	0
車両消毒	92	8
消毒液散水車	50	50

5 まとめ

農家は日頃から、自己農場で消毒を実施しているが、方法が正しいか、他人の農場と比較して確認する機会はなかった。今回消毒というテーマで農家を集めて演習を行ったことにより、農家同士の活発な意見交換がうまれた。そのなかで他農場の防疫対応を聞き取ることが互いに刺激となり、防疫意識を向上させる場となった。また市や関係団体が演習に参加し消毒の重要性を再確認することで、消毒に関する指導やサポートの促進につながることが期待された。以上のように、地域の農家、さらに市・団体を交えて一堂に演習に取り組んだことで、地域の連帯感及び地域での防疫力向上につながったと考えられる (図6)。

項目別の評価では、①消毒薬の展示及び石灰散布が特に好評であった。その理由として薬液の有効濃度や石灰の散布量などを目で見えて確認でき、改善のイメージができたこと、その内容が農場で容易に改善を実行できるものであったと考えられる。②車両消毒では、タイヤ以外の細かいところまで消毒することを確認した。さらに実演したことによって消毒場所以外にも実際にどれだけの水圧で、どれだけの水量が必要なのかを実感できたことが好評の理由につながったと考えられる。③道路消毒液散水車は初めて実物を見る農家も多く、石灰以外にも広範囲に消毒できる方法の周知につながった。さらに農場周囲の道路まで衛生管理を意識している農家も少なく、道路消毒の必要性の再認識につながったと考えられる。しかし散水車についてのアンケート結果で50%の農家が悪かったと回答し、理由に実演時の消毒液の排出量が少なかったと挙げられていた。この原因としては、消毒液タンクの蓋を閉めたまま使用していたこと及びタンク内の消毒液量が少なかったことにより水圧が弱かったためと推察された。このことを使用時の注意点として、周知する必要性を認めた。

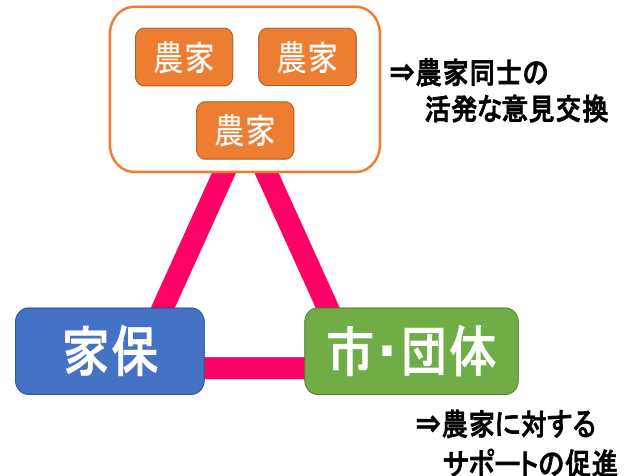


図 6. 地域の連帯感及び防疫力の向上

6 今後について

農家にとって防疫演習という言葉は難しいことのように捉え、遠ざけられることが多い。しかし身近な消毒をテーマに初動防疫演習を実施したところ、多くの農家の参加をえることができた。演習も農家同士でいろいろと情報交換をしたり、また農家側から次回の演習に対しての要望も出たりと、農家に受け入れられる演習を実施することができた。

複数の農家を集め農場で演習を実施するためには、防疫上注意する点が数多くある。しかし、今回のように地域の農家で、また市や団体も含め地域全体で防疫の重要性を考え再確認したことで、地域での防疫力の向上につながった。

消毒という基本的な内容が好評であったことから、今後も他地域でも同様に演習を実施していきたい。また、さらなる地域の防疫力向上を目指していくため、継続的に演習を実施していきたい。